

◇プロローグ

「たくさんある島の中で、どうしてバリ島だけが観光の島になったんですか？」

「ここだけがヒンドゥー教だったから。伝統の音楽や舞踊や行事があるから。回るのにちょうどいい大きさだから…。でも私はずっとバリ島にいるから、どうしてかは判らない」

「そうねえ。私も、ずっと金沢にいるから、どうして、みんなが金沢に来るのか判らないもん」

そこに住んでいるから魅力がよく判るとか、一緒にいるからその人の長所が判るにはならないのが、ヒトの厄介な所…とかく、欠点の方が目につき、鼻についてくるようになるものだからだ。それゆえ、知らない土地の華々しい宣伝に吊られ、大枚はたいて、時間も使って、出向いている。

現地ガイドのアルナワさんは、かなり話せる、おざなりガイドではなさそうとなってきたから、そう質問してみたのだ。そうしたら

「私も聞きたい。20年前は、日本がバリ島へ来るお客の3番目だった。なぜ今は8番目になったのか？」と、返された。

今は、オーストラリアやインドからの客が上位らしい。多言語のバリ島では、バリ語と英語が共通語とされているから、支障ない。でも、アジアの優等生日本の発展を信じ、日本語専門学校を選んだ彼には、誤算の時代なのだろう。コロナで干されたあげく、その後の日本客復活の遅さ…グローバル経済の中での日本のあがきは、こんな所にまで影響しているらしい。



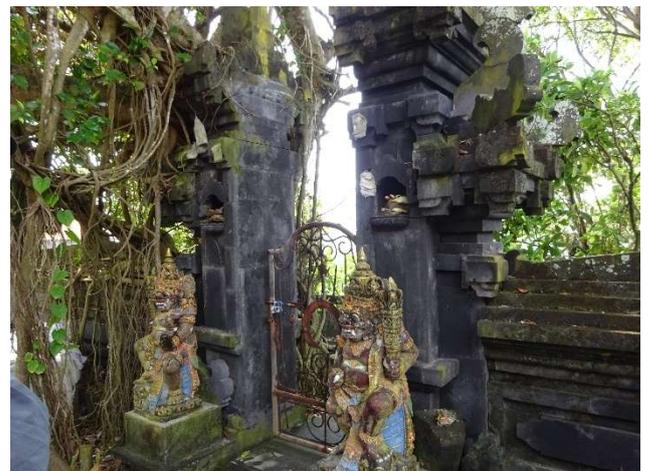
《インド洋とフランジパニ》

「円安だから？」おばさんたちは首を傾げる。どのみち、他の世代がどう考えどう行動するのか？など、世代分断の進む今では、なおのこと、判らないし、説明もできない。

そういえば、三男坊の育児と学研の両立に私が大奮闘していた頃、先輩指導者達は盛んに外遊していたものだ。その時は1\$=80円の超円高が後押しし、「外で遊んだ方がお得よ」の、強い日本を謳歌できる時代だった。女性の場合は、育児や介護に攪乱されていなければ…が、大前提になる。周囲に影響されるから、「今の内に…」と思いつきもする。

今回は、メンバー二人の快気祝いのように、「暖かい島で、日系ホテルの三連泊なら、体には優しいかも」と、推奨した「神秘と癒しの楽園バリ島の休日5日間」だった。

2月が雨季なことや、安い(18万円)のは直行便で添乗員付かずだから…は、後日の「なるほど」だった。



《バリヒンドゥーの割れ門》

これまでも、気が滅入る冬には大人参をぶら下げて、元気でいよう！を私達のスローガンにしていた。それゆえ、大雪や交通遮断にハラハラ、気温差のある荷造りにもハテ？…となりつつも、「止めておこうよ」にはならない。他の季節には、他の行きたい所へ行けばいい。やはり、12月や1月の寒くて、主婦には多忙な時期に、「〇〇が待っている…」のおまじないを唱えて奮い立ち、「あなたって元気ねえ」と言われていたい。

ところが、個人的には、11月下旬からの兄の入院騒動で、惨憺たることになった。(自分の紀行なので書いておく)。てっきり、一歳違いのパートナーが兄を看取ってくれるものであって、その後おこるであろう、パートナーと子供達との騒動時に、叔父叔母として介入すればいい…そんな順と考えていた。

それなのに、パートナーの癌が急進行して先に亡くなってしまったのだ。

失意の兄は同時に救急車騒動になり、動きそうもない子供達に替わり、私が手続きや物品運びや、退院後の入所先探しに奔走した。しかし、まだらボケと身勝手に、退所宣言したり、舞い戻ったり、また入院したり…に、キーパーソンを返上した。本来の相続人で扶養義務もある子供達に任せるべき！と決断した。当の子供たちは死期と遺産だけに関心があり、生身の世話の自覚は抜けているようだ…。けれど、兄家族内で解決すべき話と割り切るまでだ。

かたやで、認知症GHの職場はさらに人手不足が進み、それにコロナやインフルエンザが絡んで、シフト替えがしょっちゅうおきた。パートの私にまで突発で日曜出勤が回ってくる。

それでいて、1月末に、パートの5年ルールということか、「3月末で契約打ち切り」の通達があった。現場がどう人手不足でも、大元は経営指針でのコマを動かすのみ。

夫が半単身赴任でいるあと2年の間は、「近い」を何よりとして、諸々には目をつぶり、まあ続けていようか…とは考えていた。それが、「4月からどうする？」が、いきなりの課題になった。

おりしも、高校非常勤講師時代の同僚と出くわした。GIGAスクール施策にもめげず、1日1コマでも講師を継続していた彼女(今回も「文化政策博士」という肩書付きの名刺を連絡先に出してきた)は、昨年とうとう介護パートに転職したという。「78歳でも『すぐ来てくれ』だったわ。15~19時は、子持ちなら入れない時間帯だからなんでしょ。そんな需要があるのよ」とのことだった。かつての私のように「生活のけじめがつくし、報酬は出るし、社会の

役に立っていると思えるし…」とメリットを並べ、「あなたも次を探せばいいわよ」とも言った。



《ピーコックフラワーとメル》

考える…。

「こんなふうにはなりたくない」の世話をし、「押し付け」と「見て見ぬふり」が横行する職場では、マイナスエネルギーを浴びるばかりだ。

これまでは何とか、「今のうちに遊ぼう！」のエネルギーに転換してもきた。それが、次第に難しくなってきた。へこみがなかなか戻らない。

この5年の間にも、世話をうけつつ加齢する入所者達は「死ねない」を続け、確実に介護度を増している。さらに手が掛かるようになって、職員は増員されるどころか減る一方だ。それでも「入所者の尊厳」と美辞麗句を並べた厚いマニュアルだけが積み上がり、生身の介護側には、一方的に忍耐と不注意への陳謝が強いられる。それでいて低賃金のままである。

2000年に介護労働の地域共有化と女性の解放を謳い、高い時給(のはず)で始まった介護保険。高齢者の増大とともに、資金も人手も不足になり、汚い、きつい、危険(爪を立てる、蹴る、殴る、噛みつく、ののしる入所者が相手。かつ、腰を痛める)の3Kが揃った低賃金職場になった。

そのように「無益な命」と本音を言えるはずもなく、かつ無駄になる歳出を増やせもしない行政は、矛盾を全て現場の介護業界に押し付ける。経営者は、職員にしわ寄せする。建前と本音が大分離した現場は、ブラック化していく一方なのだ。

私は体を動かし働くのは嫌いではない。しかし鬱屈する職員たちは、現場の無理矛盾を次にはパートに向けてくる。教員の成れの果てなら、なおのこと昔のうっぶん晴らしまで加算してくる（被害妄想のうち？）

どの業界にも、矛盾やブラックはあるものだ。元嫁業経験者は、そのくらいではくじけない。しかし、世話をする相手に未来はなく、業界には職員にも尊厳があるとの基本認識がない。給与での改善もない…。こんな「ない」「ない」尽くしの中で、モチベーションの維持は難しい。私自身が「こんな業界で、『次』を探そう」の気になれない…。



《アデニウム》

4月で私も後期高齢者になる。

周囲を見る限り、たしかにそのあたりで、急にガタガタになっている。自分だって例外ではない。

今のまだ体が動くという貴重な時間を、この「ないない尽くし」の職場で「浪費して」いていいのか？ マイナスエネルギーを浴び続けて…でいいのか？ 「浪費」のことばがつかい出してしまう…それが、私の今の心の、正直な座標点だ。

「生活のけじめがつくし、報酬は出るし、社会の役に立っていると思えるし…」ではあろうが、それが、限りある健康寿命に食い込んできた時期の、「人生を大事にしよう」に当たるのだろうか？

しかも、年末の職員会議（非正規の私はその間、入所者の保安役側）では、「虐待防止のための監視カメラを設置する」が告げられたそう。私は、そんな経費は給与に回して、待遇改善とした方が、しい

ては虐待防止になるだろう…と思ったものだ。我慢への慰労どころか、さらに監視なんて…。



《大雪でカーポート半壊》

さて、出発1週間前の1月25日、6時間で38cmという急激な降り方で、片屋根のカーポートが半壊してしまった。朝、「やばいなあ」と思いつつ、昼にあった町会の新年会に出席してきたら、悲惨な現実が待っていた。それから夫と、脚立にも乗り、あとの祭りの雪下ろしに励む。翌朝、リフォーム時の大工に連絡をとり、解体業者を手配してもらった。

もうカーポートを建てまい…と思ったが、彼も業者も、「カーポート有りて過ごしてきた人には、毎日の車回りの除雪は辛いし、厄介なもの」と言う。大工は、「この片屋根タイプは弱くてもう製造していない。今は1.5mの雪でも大丈夫な、つまり雪下ろしが不要のタイプになっている」こと、そして「知人の下請け業者に直接頼む形で、割安に施工できる」とWin Winルートを紹介してくれた。

さらには、こくみん共済にも、カーポート半壊の被害を電話した。あとで約款を見たら、「2024年4月から、附属建物（カーポート）も保障する」となっており、これは幸いの内だった。

それはそれとして、カーポートだって、経年劣化をし、重量に耐えられず崩れる…。人間だって、まさしく、老化に耐えられず…になるのだ。

◇2月2日（月）金沢 出発前夜

監視カメラは1月末に取り付けられた。その監視下となつての、私にとっての初日（午後2時出勤）。

某男性中堅職員が、なんと、本来の割当どおりに、居室掃除やシーツ交換を済ませてあった。

この5年間、彼がそれらをするのを見たことがなかった。ペーパーなど消耗品も階下から運び、「カメラに映る場所で」補充していた。これまでの彼は、当番名が記名された入浴と調理はやるものの、不特定業務に関しては徹底して逃げ、知らん顔をしていたのだ。女性職員は苦情を交わし合うだけ。連絡の振りをしての世間話と愚痴で時間潰しが横行。後輩職員やパートに押し付けて連帯無し…で、新人はなおのこと、居着かなかった。

監視カメラの威力は絶大だった。つまり、経営者側の方が賢かったのだ。人手不足は、現状のままでも、まだまだ改善、解消の余地があるわけだ。機械に見張らせ、「虐待はもちろん、怠けぬよう」監視し、動かぬ証拠で威圧すればいい。

あちらがあちらなら、こちらはこちら…。

でも、もうタッチする話でもない。

さあ、帰宅して、All Indonesia にかかろう。



《アラマンダ》

インドネシアならITなど遅れている方かと思っていれば、なんと、All Indonesia という、入国・税関・検疫をまとめた最新ワンストップ申請が導入されているのだった。(2025年8月から必須)。

これは、サル痘(エムポックス)対策のため、入国3日前からしか申請できない。前泊としている(IT甲斐性なしの)私達の場合、2月2日にしか申請できず、余裕をもったの予備対策がやれない。

私の場合は、留守の直前確認を兼ねての、どのみち悟のバイト仕事だった。さっちゃんは諦めて、阪急に4,400円を払い、申請代行をしてもらおうとしていた。トッコさんは、お正月に長女の婿に書類を見せて快諾をとり、申請代行してもらったうえで、二次元バーコードを転送してもらい印刷…で解決していた。スマホで頑張るケイコちゃんのみが自己処理をする…となっていた。

悟にやってもらったら、日本語も選べて、当然の質問しか並んでいなかった。でも、「自分達で外国に入る」は、「英語で口頭質問されてもわかるか?」となり、やはり緊張バクバクになる。二次元コードの印刷を、大事にパスポートと同じ場所に収めた。

◇2月3日(火) 金沢～東京～成田

出発日の今朝は、長靴を履いて、ダウンを着てのスタイルにならざるをえなかった。そして、トランクが迷惑にならないよう、通勤通学時間帯前のバスに乗ることにする。

融雪装置のある所は、溢れる水でビシヤビシヤだったし、一方、他はやはり除雪されておらず、足跡のみ。トランクを持ち上げて、ガタガタの雪道をこけないように歩き、バス停に向かった。

3人無事に金沢駅改札口に集合でき、All Indonesia 取得のハラハラを報告し合う。

北陸新幹線には全く支障なく、長野の青空を見上げた時には、やっぱり雪で大損しているなあ…とも思った。雪の縦縞模様を浮かべて聳える浅間山が綺麗だった。



《浅間山》

東京駅八重洲口、大丸のレストランフロアで、日本最後の味、親子丼を頂く。「娘と孫娘が、歌手グループの追っかけをやってるのよ」「気がしれないよね！」と姦しくしゃべっていたら、隣のテーブルの家族連れの女の子に睨まれた。よほどうるさかったのか、「気が知れない」が気に障ったのか…まあ、分断の時代だ。

今時スターの、男の顔の区別はつかず、女の顔も同じにしか見えない。それを10本の指にネイルをてんこ盛りにして、キャアキャア追いかけて回っているなんて…。

男女共同参画社会になったら、女性は少しは押し付けから解放されて、望むように活躍していくのかと思っていた。こんな軽薄になっていく…とは予想だにせず。かえって、「周囲への気遣い」は、けっしてマイナス面ばかりでなく、品性の内でもあった…大切な社会教育でもあった…しかし、つまりは自分達は、そうやって気を遣って、結果、割を食わされた世代になっているのだ。

今の時代を謳歌している者達に、前時代的な説教をしても始まらない。説教できるはずもない。こんな所で昭和元嫁たちは顔き合い、世代の共感をし、外遊を正当化する。

マイステイプレミアム成田の、素泊まりトリプルは、楽天経由で4,160円。夕食、朝食は、下のコンビニで購入。ケチる所はケチる。

バリ島は蒸し暑いので、長靴、ダウンコートを手荷物に収め、夏服を出した。



《亀の島で。メンバー10人の内の8人》

◇2月4日（水）成田～デンパサール～ホテル

第一ターミナル北ウイング、端っこのGカウンターに向かう。卒業旅行の時期にはまだ早く、全体に閑散としている。高市氏の台湾有事発言で中国インバウンドが減っているのも、影響しているのかもしれない。

総勢10人と聞いて、ホッとすると、九寨溝の28人はひどすぎた。込み合って、待たされて、数える時間ばかりが長くて…。あれに比べたら雨季であろうと、空いている時期の方を選ぶべきと思える。

ケイコちゃんも無事合流できた。痩せた結果「もともと履いていたズボンが、みんなオーバーズボンになってしまったわ。でも重ね着にして、すぐ脱げるから便利よ」と言う。私はもう、しばし我慢の南国仕様にしてきたが、直前にひどい風邪をひいたというさっちゃんは、ここでタイツを脱ぎに行った。

トランクにオレンジのタグをつけてもらい、見分けてもらうためのオレンジバッジを胸につけ、Fカウンターに向かう。

4人一並びでの席を頼む。「いよいよ海外だ！」を思わせた、癖のある日本語禿げおじさんは、出発ゲートの所にもまた来ていた。一日一便が往復するガルーダ航空は、地上業務も限られたスタッフでこなしているらしい。



《空港カートに初めて乗った》

「Gate26なんて…また、端っこなんじゃなあい？」と姦しくしていたら、カートが「どうぞ」と

止まってくれた。「えっ、どうやったら乗れるんだろ
う…って言うてはきたんだけど?」「無料です。どな
たでも乗れるんです。」

おばさん一行ははしゃぎ乗って、自撮りのうえ、
さらに記念写真も撮ってもらった。旅は思い切り楽
しく…で、いいんだ!

飛行機内のアナウンスに日本語も入っているが、
スタッフは基本、インドネシア人ばかりのようだ。
CAは英語だし、映画も日本語は、字幕物しかない。
だから日本映画を選び、英語の字幕付きで見る。

学園物映画なんてわざわざ見に行くはずがないの
で、「お嬢と番犬君」を面白く見た。今時の美女（福
本凜子）と美男（SixTONESのジェシー）をなるほど
と観察。「侍タイムスリッパー」も、珍しい名前の山
口馬木也の出世作とのうろ覚えがあったので見た。
ネットフリックスなどに嵌まりたくない私は、2時間
ずつ潰せる機内映画タイムを、重宝している。



《日本で積み込んだ機内食》



機内食も日本で乗せているせいか、おいしかっ
た。8月にコロナらしきをやってから、9月の西オー
ストラリアも、10月の九寨溝も、味がしなくなって
いた。加齢がこんな所にも出てくるものかな?の懸
念にもなったのだ。薄皮饅頭がついていて、「やっぱ
り日本積み込みだよ」だった。

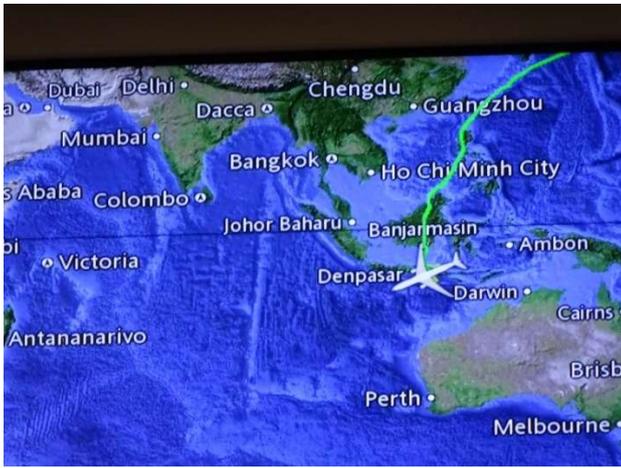
一時は、こんな旅の時間がもう終わってしまった
…と観念したのだ。「ああだ、こうだ」のわいわいシ
ーンが、みんな嬉しくて、幸せに思えた。

飛行機はこれまでで一番といえるくらい、何度も
揺れて、安全ベルト装着を指示された。赤道近くには、
いわゆる北東貿易風というのが吹くものなのだからか?
赤道で大きく膨らんでいるから、航空図での機体はな
かなか進んでいかない。

「そういえば、赤道のどっちだっけ?」となり、ガ
イド本を開く。「マレー半島のすぐ下に赤道が通って
いて、そのすぐ下だから、南半球に入るんだわ」

キナバル山のあるボルネオ島（カリマンタン）は
トランプが狙っているグリーンランドに次ぐ大きさ
の島である。その近くのスマトラ島、ボロブドール
遺跡のあるジャワ島も大きい…バリ島の位置と大き
さ（東京都2個分、マイナス1時間の時差）をよう
やく確認する。

なんでこんなに小さな島に、わざわざ国際線の飛
行機が飛ぶのだろう?



《航空図。目的地はデンパサール》

いよいよ、パンフレット類を最終確認する。

- ① VOA (ビザオンアライバルビザ) を取得
- ② All Indonesia を見せ
- ③ 観光税を払う

現地ガイドに出会うまでが正念場！バリ島を薦めた以上は、ちゃんとリードできねばならぬ！

雲の中…雨季だもの…。1時間遅れての18時30分、デンパサール着陸。機内で夕日を見ての、夕暮れ時。さすがに蒸し暑い。寒い間は忘れていたムツとくる熱気…。立派にヒートショック！

お客は…サーフィンボードをかかえたのやら、肩も露わやら、へそ丸出しに、タトゥーだらけに…さすがにリゾート地である。

人の流れに乗って…指南書に載っている VOA とは看板の色が違うけど…だったが、結局はそこが①だった。ここで、50万ルピアのビザ取得料と13,500ルピアの取得手数料を払う。その領収書は申告したメールアドレスに送信される。

6,000円を渡した(おつりはルピアで出る)が、その受付台が高すぎるのと、そこにタブレットを置かれて、「アドレスを打ち込め」…とされているらしいが、当方、タブレット入力をやったことがない。トッコさんは到底、受付台には背が届かない。

結局、さっちゃんがノートに書いてあった、姉上のメールアドレスを見せ、職員がまとめて4人分のアドレスとして打ち込んでくれて、通過となった。もおお…すでにたっぷり汗をかいた。

次に②。印刷で出す人、スマホで提示する人。ここでケイコちゃんのスマホから登録画面が出てこない…がおきた。それは、パスポートを見せることで、事前登録してある…が確認でき、通過できた。冷静に考えれば、無害な日本人観光客を排除するはずもないのだが…心臓に悪い。



《現地ガイドのアルナワさん》

最後の③を探しながら…で、トラピックスのミートボードを見つけた。現地ガイドが「『観光税』をあちらで払っててください」と言う。それはどこ？戻って、角を回って、並んでいるお土産店の一角が、そのカウンターだった。15万ルピア(1,400円)を、2,000円で払い、おつりをルピア札で受け取る。



《インフレ気味の高額お札》

ここまで書いてきたように、インドネシアルピアはインフレ気味（1円=104ルピア）。クレジット決済などが進む一方で、札束はゴムで結わえられている。近江町のおじさんも「はい50万円！」と言って、おつりを寄越すけどさ…。

これで一件落着。それでも10人の内の先頭で、後のメンバーを待つことになった。絵地図なんかをつけて、もう少し判りやすくはできると思うが…。待つて待つてで、最後に、父娘のペアを迎えて、ゲートを抜ける。

観葉植物が巻かれている柱の立つエントランスで、専用バスを待つ。雨上がりの路面。結局、20時20分、ようやくバスに乗ったのだった。

ガイドはアルナワさん。青いトラピックスマーク入りのTシャツに、民族服である緋柄のサロンをつけ、頭には同じ生地製のウドウンを巻いていた。「ガイドはこの正装をするのが決まり」で、彼は「5セット持っている」とのことだった。

まず、「デンパサールは町の名前であって、空港はグラライ空港と言う」「グラライは独立戦争の英雄の名で、他も、固有名詞はほぼ、英雄の名を使っている」そうだ（スカルノもそう。親日は、デヴィ・スカルノの影響か？）。

「今は雨季で蒸し暑い。オーストラリアが3時間で行ける一番近い国に当たる…という位置の島である」「水道水は飲まないように。ミネラルウォーターを日に2本配るから熱中症対策をしてほしい。ホテルの横100mにコンビニがある」「蚊取り線香は引き出しに入っている」（トッコさんが、出国審査で「マッチが大丈夫？」と慌てていたが、それは蚊取り線香用だった）。「カメのぬいぐるみプレゼントが置いてあるのも、忘れずチェックし」「ロビーは2階、ディナーは1階、朝食ブッフェは別の1階」「これから配るお土産は人気ブランドのチョコと、虫刺されにも効くハーブオイル…」

メモが追いつかない。

明日11時まで自由時間というのは？泳げるの？お勧めは？「オプションとして、グラスボートに乗ると、個別マッサージが申し込める」とのこと。

さっちゃんの荷物が大きめで重かったのは、足ヒレを持ってきていたからだった。実はさっちゃんは大島は2回目。大昔、義祖父孝行も兼ねて、ダイビングに来ているという。ご主人は昆虫採集三昧でいたが、今では保護政策でやれない遊びであるらしい。

「朝日は5時半から6時に見られる。朝食は6時半から10時半」「グラスボートは底がガラス張りで魚やサンゴが見え、カメの島にも寄る。それはサンダル履きでいい。9時にロビー集合でピックアップに来るから、5,000円を業者に払って下さい」

そして、夕食につくウエルカムドリンクの選択を尋ねていった。

30分ばかりがそんな説明で過ぎ、ホテル到着となった。暗くて周囲の情報がわからない。道路から上がった所が吹き抜けのロビー、まず遅い夕食に向かう。

どうもこちら側が、ビーチに向いている方らしい。サロンを巻いた給仕人が、ポークリブの皿を置いていく。フォークにナイフでは無理。手づかみで…おいしい！

今回は、日系5つ星ホテルで、ホテル・ニッコー・バリ ベノアビーチに3連泊なのだ。全室バス・タブ有り、洗浄機能付きトイレ有り。



《ニッコーバリのプール》

思い起こせば、「5つ星」なんて…ネパールトレッキングで初めて、最初と最後に5つ星ホテルに泊まった。国内ではやらない贅沢！と、わざわざ紀行にも書いた。

同じ時刻に着くならエコノミーでいい、泊まるだけの空間なら狭くて備品無しでもいい…差額は別の有意義のために使いたい。この価値観はなかなか変えられない。

しかし74歳になっての人生の終盤…もうちょっと贅沢をやってみてもいいのかもしれない。「(パック旅行の)トルコ料理がまずかった」と言って「安物買いじゃねえ」と返されたことがある。妥当な対価も払わずにブツブツは、反省事項でもあるのだ。

富裕層がいてこそ、卓越した専門家や芸術家が育つ。気取ってみても始まらないけれど、あまりにも価値が判らないまま、半端に時間とお金を使い、自分勝手な判断のままで、この世からおさらば…というのも…。かえって、時間も、お金も、人生も、粗末にした…にはならないでしょうか？



《5つ星ホテルのデザート》

続いてのアイスクリームも、帽子型のカップに乗って、お洒落…の途端、「あれ？噴水じゃないよね」「なんか、タイルも濡れてるよね」の間に、ゴーッとばかりのスコールになった。さすが雨季。こうやって日に何度か降るのが雨季のスコールらしい…。

明日は大丈夫か？私以外は水着の用意もしていたらしいが、浜辺の地形もよくわからないので、4人とも、グラスボートを申し込むことにした。

注意書きが何かと渡される。もうセラミック店での割れ物の注意書きや、連泊ゆえの、清掃希望のサインの出し方云々の紙片を渡される。

阿吽の狛犬もどきの間を抜け、バティックの壁掛けを過ぎた先が、私とトッコさんの部屋、「365」号室だった。さっちゃん達は手前の361号室。

海岸ホテルは、高さの規制がかかっている、その分、横に広い。4階までのこのホテルの内部は、2つの客室棟を、吹き抜けロビーのある渡り廊下のような棟が繋ぐ造りだった。ロビーの真下にある中庭プールを正面にした朝食会場へは、ロビー前のエレベーターか階段でしか行けない。他のエレベーターや階段を使うと、行き止まりになってしまうのだった。そうと判るまで、何回か、運動をした。

誤解が多いからと渡された清掃希望の紙片は、読んでも判りにくかった。ベルの赤表示が「起こすな」で、緑のヒトが「清掃可」か？緑のヒトの時には、ベルも緑にしかならず、どんな「押し間違い」が出てしまうのか、やはり意味不明。

日本人向けのわりに、シャワーヘッドの位置は高く、扇形のバスタブは、お湯を貯めるのに時間がかかる、シャワールームからバスタブに移るときは床がビシヤビシヤになる…だったが、南国柄の部屋着をまとい、就寝！



《リゾートモードのバスタブ》

◇2月5日(木) ベノア

「ピピピ」「ピピピ」 6時…やたらとうるさい。小鳥がベランダ前の樹に群れているのだった。それが10分ほどでピタッと止んで、次には鶏が鳴いた。小

鳥が鳴くからには、晴れているのだ。朝日は左のヤシの間に、それらしく見えた。

6時半、朝食に降りると、さっちゃん達はもう朝飯前の散歩していたらしい。眼前のビーチは、今、干潮ということだった。どのみち、泳ぐのは無理だったわけだ。

メニューを物色する。品名を書いてあっても、ほぼ分からない。おお、期待の南国フルーツ！この赤ピーマンみたいのは何だ？もじゃもじゃは？このトッピングらしきをいれたら、ラーメン？スープ？

それぞれ確保して、「それ何？」「おいしい？」「半分コしよう」「どこにあった？」と、わいわいがやがやが、これがまた楽しい。多分、太古の女性はそうやって、食べられる物を見つけたり、食べ方の情報を交換したりしたのだらうと思う。帰ってからは「バリ島風なんとか」なんてのを作って、楽しんでみるおまけもやれる。



《南国の果物》

私が確保したバナナの葉で包んだのは、焼きそば風のミーゴレンだったみたい。さっちゃんのはバリ島定番のスープだったよう。赤いピーマンは、梨の仲間か？だった。もじゃもじゃはライチの仲間（ランブータン）と判定する。

中庭へ出てみる。朝までのスコールで、多くの花が落ちていて、従業員たちが朝の掃除にかかっていた。南国の花だ…。あつ、フランシバニ！たぶん。昔ナシゴレンを食べに行っていた（東急の4階にミニシアターがあって、そこでマイナー映画を見る時には、G階でナシゴレンランチ…が、定番）店の名

がフランシバニで、そこらじゅうにそのアートフラワーが飾られていた。多分、その花の名なのだ。

ナミビア砂漠で見た赤い花、桂林の洞窟前で見た紫の花…また、会えて、思い出せた。



《サガリバナに似た花》

サガリバナに似たネムの花状のも手のひらサイズの特大的が、いくつも落ちていた。どの樹？ヒョウタンのような実がなっているこれか？

黄色のヤシの実に、バナナの花。実がなるとそのバナナの木（草？）は枯れてしまうらしいが、その頃にはちゃんと脇芽が伸びてきている。

さらに浜辺へ出てみる。遠くにバリアリーフが見えて、さらに奥になら、大型の船がいる。左手にはバリ島の最高峰、アゲン山 3142m（あとで地図で確認した）が雨雲の上に見えた。



《バリ島最高峰 アゲン山》

ロビーに行くと、山梨からの夫婦（戦前生まれの夫。高齢者施設の運営に関わっているか？）と、母

娘（娘は、体育系の教員だったことがあるらしい）もグラスボートを申し込んでいると判った。

今回は4人でまとまりすぎてしまい、他の同行者との会話がぐんと減ってしまった。袖すり合うも多少の縁…の楽しみの方を減らしてしまった（だから一人参加の旅も、出会いがあっても悪くはない）。

アルナワさんに白い花の名を聞くと、「プルメリア、英語ではフランシバニ」と答えた。赤やピンク、黄色があり、年中咲くそうだ。



《フランシバニ》

ロビーの前は階段を下りての道路になっている。

「信号ないねえ。それに壊れているみたいねえ」に対して、「みんな注意しているから、事故は少ない」「保険がない。だから、みんなが注意して、自分からよける運転をしている。保険が無いから、示談にする。まとまらないと、裁判所へ行くが、裁判所も示談を勧める」とのこと。あとでは、どうやらヒンドウの、「譲れば、替わりに善いこともある」の教義が底辺にあるなあ…と思った。

そして「ボートの運転手は時刻が判らないから、カメの島から帰る時刻に注意して、告げてほしい」と言われる。

（ホテルのあるベノアビーチは、マリニアクティビティの中心地として、バリで最も賑わっているエリア。岬を回った西に、ウミガメの飼育場のある小島がある…とのガイド本情報）

迎いのジープ2台に分かれて乗り、別のビーチに向かう。5,000円を払い、冷たいミネラルウォーターをもらい、10人乗りというグラスボートへ。膝まで

の水深の砂浜から船に乗った。ビニル袋には、撒き餌用の食パンが入っていた。



《グラスボート》

沖に出ると、サンゴが出てきて、撒き餌慣れしたシマダイが寄ってきた。食パンを撒くと、争って食べる。

そこから移動。外国資本のホテル群が見え、海岸沿いの高速道路が見え、ジェットが飛んで行くのも見えた。カメの島が、ウミガメの実際の産卵場所なのか？は、判らない。

やはり、足を濡らして、砂浜へ上陸する。カメを年齢と種類別に飼育しているらしい。まず、40年物のミドリガメ。海藻をおいてあり、餌付けのようなことがやれて触れる。さらにはカミツキガメみたいのや、幼体やがいる。こんなのを飼っていてどうペイするのかは不明。



《40年物のミドリガメ》

そんな水槽の次には、檻があって、大きな鳥やジャコウネコ（翌日のルアックコーヒー店で判明）が飼われていた。中年女は何度も「ボランティアでやっている」を強調したが、寄付とお土産売りが本命だった？ようだ。

ここがどう珍しいのかもわからず、気も乗らず、砂浜に戻る。浜辺に置かれた供え物の方に、「これは何？」と気をひかれた。早々の引き揚げで、再集合に遅れる懸念もなしに引き返しとなる。

朝よりずいぶんと船が多くなり、ジェットスキーの操縦や、大型浮袋に乗って遊ぶ客も見かける。

パラセーリングも見かけた。私は、キナバル登山の後の、予備日兼静養日のリゾート、コタキナバルで、これを体験した。水面すれすれに下ろされたり、視界が広がったりが楽しいものだ。

二人乗りで、いかにも元教師と一緒にだった。登頂時、彼女は足が遅くて、ポーターが一人付いての別行動になった。そのことでの専有料金を求められたら、「自分はマイペースで歩いただけ。頼んだ覚えはない」と断固支払い拒否を通し、ひと悶着になったのだ。あの時は、「戦争で父が南海に沈んでいて」が参加動機のおじさんがいて（登山が目的というより、その海を見たかったそう）、他人の荷物まで「いいから」と担いで、先にばてていた…。

それぞれが、老いていく姿だった…。旅先は暇だから、普段なら思い出さないことまで、ついでに思い出してしまう。

元のビーチには、船を引き寄せる係がいた。それなりの会社があつての、遊覧だったのだろう。最後まで、脚を濡らしての上陸となったら、足が砂だらけ。受付員は、「あのシャワーで足を洗え」の「足ふきタオルがあるか？」「ビニル袋は？」のと、よく気が回る…5,000円か…ではあった。

そうやって無事、ホテルに戻り、再出発。「朝食は？」に「おいしかった！」と答えたら、バリ語では「エナック！」と教わる。それがGOODの意味で、「気持ちいい」にも使えるという。この後も、書き留めておしまいのバリ語は…

トリマカシー →ありがとう

サマサマ →どういたしまして

ジャランジャラン →散歩 ジャラン →道

ジャランQは、バリ語が語源だったんだ！



《バリ舞踊のモニュメント》

27人乗りのマイクロに、10人だから、各自が窓際に座れる。車窓の異国風景は楽しい。絵葉書にはならない程度の、そこでの暮らしが見えるのは、同じでも違っていても、興味深いものだ。

空港近くの洗練された道路、バリ舞踊のモニュメント、交差点でさっと近寄ってくる物売り、頭に荷物を乗せて運ぶ人、絡みに絡んだ電線、タトゥーを入れた旅行者…そして花がいっぱい。



《絡みに絡んだ電線》

アルナワさんのガイドは続く。「バリ島には電車がなく、バイクが主体。1台に、子供・父・子供・母の順に乗って、家族移動する」「海岸の高速道路+バイク路は2014年に整備された」「海の奥に見えるの

は高さ 120m の GWK (ゲー・ウエー・カー) で、2018 年、サミットを機会に建設されたガルダ・ヴィシュヌ・クンチャナ像」 知性の神ヴィシュヌが翼を広げた神鳥ガルダに乗る姿で、目立つランドマークだ。



《GWK とジェット》

「バリ島には 5 つの宗教があるが 80% を占めるのがヒンドゥー教」「毎日お供えをし、日に三度祈る」「火はブラフマンで白鳥に乗り、水はヴィシュヌでガルダに乗り、風はシバ神で白い牛に乗る。したがって、豚肉は食べ、牛肉も食べるが、白い牛は食べない」「一般家庭の建物の高さは 5 m までに制限される。それはヤシの木を越えてはいけないとして、バリの景観を守るためだ。ホテルも、神様を見下ろしてはいけない…の考えから 3~4 階までに制限されている」



《高木のヤシ》

「ヤシには高木と低木の 2 種がある。高木のヤシの緑の実がヤングココナツとして、ジュースが飲め

る。それは緑のうちに、木登りして収穫せねばならないから高くなる。黄色の熟した方は、落ちるのを待って、白い内皮からオイルやココナツミルクを採る」という。

(ヤシ科には何種もあるが、ココヤシの実がココナツあるいは椰子の実と呼ばれる。固形胚乳と液状胚乳がある。液状はジュースとして飲み、成熟果の厚い胚乳を削って、コブラやココナツミルクが作られる)



《格の高い棕櫚製屋根の家寺》

それにしても、不思議な灯籠状の建物が目につく。建物の前にあってお供えがされて、白黒の布が巻かれていたり、あるいは囲まれた中にいくつも建っていたり、あるいは、対称形の門があったり。

アルナワさんは「家寺 (ウチ寺 ガイド本では屋敷寺) です」と言う。このあたりなら家の敷地の北東側…それはバリ島の最高峰アゲン山の方向に向けてということだが、アゲン山という神に祈ることになるのだ。「アゲン山より北の地区なら、南側に作ることになる」「日本にも北枕ということばがあるが、バリ島はアゲン山に頭を向けて寝る」「家の中にも神棚相当があるが、外から見える家寺を豪華に綺麗にしておくのが、その家がしっかりしている証拠になるから、張り込むし、手を掛ける」「火・水・風をそれぞれ祭ったり、村の寺、店の神棚、市場の神棚もあり、有力者が金をかける」

巻かれている布の多くは黒と白のチェック (ポレン) だが、「それはプラス (善) とマイナス (悪) の意味。ヒンドゥーは、どっちもバランスよく必要…

の考え方をする」「外から見える塔へのお供えは上と下であり、それも、陰と陽の考え方。右手が綺麗で、左手がきたないとされるが、それを合わせて合掌とするのが、調和がとれ最高とされる。左右対称形の門は、割れ門といい、合掌の姿でもあり、邪気を払うとされる」



《割れ門とポレン》

ネパールのヒンドゥーはもっとグロテスクで、エロチックだったり、残虐だったりだった。

ここからがガイド本からの知識。

インドネシアがイスラム化していく中、バリ島だけにヒンドゥーが残る過程で、土着宗教の「供物を捧げて祈る」により傾いていったらしい。

バリという島の名は、供物・供儀・いけにえを意味するサンスクリット語 wali, bali に由来するの説があり、島全体が神への捧げ物なのである。



《タナロット寺院で見た供物（チャナン）》

神は美しいもの、優れたものを好むから、気を使って供物を作り、きれいな音色の音楽、美しい舞い手の舞踊、心を打つ物語の演劇も捧げものであるとし、それらを清浄な心で、真心をこめて捧げるのが、バリ人の宗教の美学である。

それらを支えた宮廷が崩壊したあと、オランダの植民地時代には、特産品なしの島と放置された。

一方で、孤島のヒンドゥー文化に好奇心を持った欧米学者達の関心を得た。欧米からの移住者たちがバリの伝統文化を洗練させていく。同時に、高カーストたちは、地震や凶作を神の怒りとして、宮廷文化の復活に力を入れるようになった。

そのように、バリの伝統芸能の多くは植民地時代以降の産物であり、当時活性化していた宗教儀礼を基盤に、外国人観光客からの刺激を受けたバリ人が、観光ビジネスとして洗練させていったものなのだ。



《彫刻家ニヨマン・ヌアルタの展示館》

そして、バリ文化の愛好家・研究者は集まってサロンを形成し、バリがヒンドゥーの宗教文化を基盤とし、村人全てが芸術家であるような「楽園」というイメージを世界に発信する。さらに、バリ人芸術家と欧米芸術家がたがいに刺激し合い共振し合うことでの新たな芸能・芸術が次々と生み出されていくという、バリ文化の「ルネサンス」と評されるような状況が生み出された。

ちなみにチャップリンは、新婚旅行先に、ハワイではなく、バリ島を選んでいる。不便な海路の時代

にも、すでにバリ島のブランド化は進んでいたのだ
った。

太平洋戦争と独立闘争を経て、インドネシア共和
国はバリ島には観光振興策をとった。観光産業は伸
長を続け、自然体験型の観光や、エコツーリズムも
興隆させている。観光依存体質を問題視されつつ
も、バリ島は世界レベルでの観光産業の島なのだ。

(以上が、冒頭での問い「バリ島だけがなんで観
光島に？」の答えでもある。)

昼食が先か？寺院見学が先か？は、天気次第で決
めるという。ようするに、下車した地点にレストラ
ンがあり、そこから10分ほど歩いたら、洋上に浮か
ぶタナロット寺院があるのだ。

ガイド本には、「世界で一番美しい夕景スポットと
して知られる」とある。すなわち、今度は西海岸沿
いに移動している。

チャンゲー県は絶好の波が立つ、サーフスポット
として人気があるそうだ。スミニャック&クロボカ
ン開発の波が押し寄せ、世界有数のクールなりゾー
トエリアに大変貌を遂げている…とある。

クロボカンとは、刑務所のある地で、いわば辺鄙
な地だったわけだ。広大なインド洋とのどかな田園
風景が広がるエリアは、上半身裸でタトゥー入りの
ライダーや、剥きだし姿の外人女性（バリ島女性で
あれば、日焼けを嫌がり長袖でいるそう）が背中
にはりついたペアライダーが、押し寄せるエリアにな
った。



《リゾートのタトゥーライダー》

狭い道路は結構込んでおり、かつ天気は青空がひ
ろがりつつある。まず、昼食となった。海の見える
あずまやスペースに案内され、ヤングココナツが運
ばれてくる（45000 ルピア）。薄ら甘い液体は、スト
ローで吸っても減らず、ペットボトル1本分以上あ
りそう。



《ヤングココナツを飲む》

向こうにはお客の数に対しては多すぎる若い男女
が控えていて、クスクスとつき合ったり、おしゃ
べりしたり、あまり従業員風ではない。あとで、アル
ナワさんから、見習いの子達と聞いた。このあたり
には、国立の観光大学もあって、おもてなしの実
習に来ているものらしい。



《女性の正装》

彼女たちも給仕も、デコルテが大きく開いたレー
スのクバヤに更紗模様のサロンを巻き、ウエストを
スレندانで巻いた正装スタイルだ。土着信仰や仏
教徒と融合しているバリのヒンドゥー教の正装は、

清楚で慎ましやかな感じだ。祈りの文化は、控えめで恥じらいがあり、微笑みなどが、東南アジア共通と思う。稲作文化での協働も、そうさせるのかもしれない。

さっちゃんが「朝のスープがこれだった」という、鶏と麺のスープ、ナシゴレン、フルーツをいただく。辛すぎもせず、食べやすい味だ。



《ナシゴレン》

ここからは右に海を眺めつつ歩く。サングラスが必須。インド洋にフ랑ジバニは、いかにもバリ島。ヒンドゥーらしい鬼神は、グロテスクだが、愛嬌系。



《ヒンドゥーの鬼神と花》

ここに実は4つの寺院が近接していて、岬に張り出しているのが、穴の開いた岩の上にあるバトゥボロン寺院。そこから海をはさんでもう一つ寺院があり、そこからまた海を挟んで、海の岩の上に建つ、タナロット寺院の順だった。干潮時には陸に繋がる

が、異教徒は入れないので、どのみち、手前で眺めるだけであった。



《タナロット寺院》

ここには物売りのほかに、蛇を巻きつけて写真を撮らせるテキ屋がいた。また、カメ島でも見た、チャナン（ヤシの葉で作ったお皿に、花やお菓子、線香などを載せたお供え物）があり、これは「悪さをしないでね…と、悪霊に捧げる」ものらしい。丁寧と言うか、暇と言うか…。

ここはジャワから渡ってきた高僧ニラルタが、靈験を感じ、村人に寺院の建立を薦めたのだという。空海みたいなのが、いるのでしょうか。

土産物屋の間を通過して戻る。木彫り、編み籠…私の好き系が多いが、断捨離を念じて、我慢。



《手工芸の土産物》

バスの最前列に座った山梨夫婦が、風景に若者ばかりだったのを見て、「バリは子供が多いの？」と質

問している。昔なら 10 人、今はやはり 2~3 人。アルナワさんは娘が二人。

「年寄りはいないの？施設に入っているの？」「施設はない。家にいる。家にいてヤシの葉を編んで、チャナンを作っている。そうでなかったら、お土産を売っている」

日本を基準にして高齢者問題を聞いても、ピント外れなことだろう。施設に来ているミャンマーの技能実習生達も、「コンナ施設ハ、私ノ国ニハナイヨオ」と答えている。

2000 年にできた介護保険は、樋口恵子さんあたりが「介護を社会化する。女性を家庭介護から解放する」として、勝ち取ったように解釈された社会保険だった。実は、公助・共助のオブラートに包んだ、巧妙な詐欺かもしれない。人口比が大きく変わっていくことが判っていながら発足させ、官庁だけの裁量制度にしたのだ。

四半世紀が過ぎ、平均保険料はその間に 3 倍になった。介護は在宅が基本になり、サービスはコマ切れに限定された。足りない分は、自腹でヘルパーを雇わねばならない。火災保険のように、自分が掛けた分に見合ったサービスを受け、そこまで我慢ならまだ判りやすい。年金から天引きして再分配とすれば、ここでまた「制度にただ乗り」のようなことがおきる。ただただ「死ねない」を続けている人に、歯止めなく、お金が消え続けている。

我が家で働ける間は働き、不調になったら短い介護で人生を終える…それが当事者にも、家族にも、自然な生き方、死に方だろう。



《年中取れる棚田》

さて、棚田が広がり始めた。バリでは三期作どころか、年中米が取れる。ヤシの実はなっているし、ドリアンやジャックフルーツ（畑の縁の栽培もの）も、車窓を横切る。

ドリアンやジャックフルーツは、幹生果と言われ、幹や太い枝に直接実をつける仲間だ。熱帯雨林に特徴的で、幹の中に長い間眠っていた芽が再び動き出し、幹の表面からいきなり花が咲く。幹なら、維管束が発達し、水分や栄養をたっぷりとれて、大きな実に育つ。それは動物には近づきやすく、食べやすく、種子が運ばれやすい…にもなるらしい。

チョコレート原料のカカオもこの仲間で、ゆえに、次は本場のチョコレート工場…となる次第。チョコで有名なスイスは寒い山の国だが、ミルクチョコレートを初めて作った。特産のおいしいミルクと合わせる努力をして、名産品にしたのだ。

どのお土産にも「〇〇へ行ってきました」チョコ（型取りしたり、ナッツを入れたり）がある。最近特に値上がりの激しいチョコレートだが、原産国ゆえ少しは安め…があるだろうか？



《チョコレートドリンクの売店》

昨日配られたチョコには、南国テイストが随分とあり、かつ、ここでテイスティングできるという。

コロナの間にできたらしい、入り口の洗浄器で手を清め、カカオ豆のかけらを食す。日本でもチョコの代替に、ひよこ豆をローストしたり、ゴボウをローストしたり…が試みられているらしいが、いかにものロースト豆で、この程度が原材料なら、十分代替製造はやれそうだなと、思った。

工場は脇を通過するだけで、あとは売り場へ。個包装も纏め売りも、バリ島柄になっていて、まずはバラマキにはよさそう。それに、溶ける心配はないそう。ミーゴレン味、チリ味などの最近物を外して、ココナツ、ローズ、マンゴーなどを選ぶ。そして、アイスチョコドリンクを飲んだ。これもチョコレートの原産国で味わっておきたい。旅は、食べて、飲んで！

道中には、木工家具店が多い。鳥籠も…聞いたら、鳥を飼う人が多いのだという。綺麗な鳴き声を聞くためだ。生き物は、つい面倒が先立つけれど、年中果物が豊富に実り、花が咲く島、そしてお供え物を欠かさない島だったら、ごく気軽に飼えるのかもしれない。

次が、タマン・アユン寺院。島内では2番目に大きく、世界遺産に登録されている。それはお寺そのものというより、灌漑水利も含めた景観が評価されてのリストアップらしい。



《タマン・アユン寺院の割れ門》

ムングウィ王国の国寺として1634年に建てられたとあり、アグン山を模したメルという塔が10基建っている。屋根の数は奇数で、11層が一番高く、それが4基ある。その屋根が棕櫚製も、格が高い。

まず入り口に割れ門があって、屋根がついている家門があって、さらに山の形の塔門がある。

それらは、今ではガイドブックより、PC検索した方が、はるかに詳しい。どの国でも、入場とともに受け取るパンフレットというものが無くなってき

た。経費が掛からないし、ごみがでない。いいことづくめのようにいて、こちらには正規や最低限といえる情報が入らない。初めての固有名詞は耳だけでは記憶に残らない。スマホで、かつ何語でも検索できるのだろうが、印象が薄くなるのは否めない。



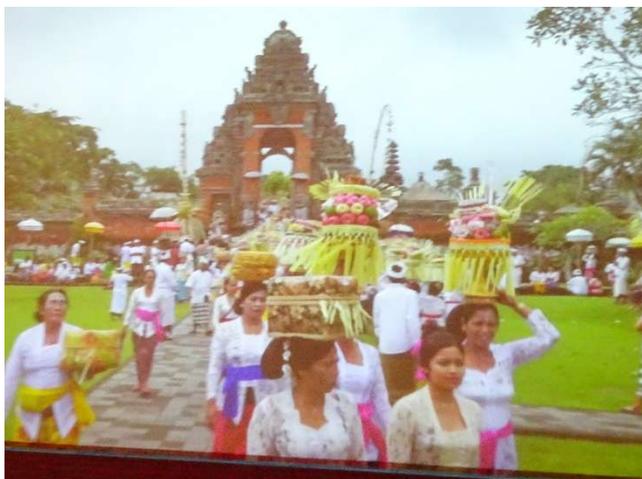
《タマン・アユン寺院の塔門》

ここではたくさん記念写真を撮ってもらった。タマン・アユンとは「美しい庭」という意味だそうで、お花も多かった。門の前のパゴダフラワー、メルに重なるピーコックフラワー、堀のハスも、外側のヘリコニアも、盛りだ（写真に撮って、照合した）。インドラ神の奥さんは豊穡の神で、足元の池には鯉や黄色の鯰が泳いでいる。祭礼に使われるパロンが飾られていて、建物の中には寺院全体の模型や、祭礼の写真が飾られていた。



《10基あるメル》

祭礼というよりは火葬式ガベンのことで、いろいろ通過儀礼がある中、人生最大の儀式とされるらしい。よい日を選び、聖なる牛の形の棺に遺体を入れ、華々しくパレードをする。最後は火葬して灰や骨をヤシの実の殻に入れ、高僧に祈りを捧げてもらった後、川か海に流す。これにより魂は清浄になり天界に昇るとされる。



《ガベンのパレードの写真》

それなら、死は恐れるものではなく、人生の上がりとして迎えられる。これを見た方が、バリ島文化を理解できるのかもしれない。

今、日本はどんどん家族葬になり、墓終いも盛んだ。仏教は葬式仏教となり、戒名の何のと高額になり、その後の法事も形骸化して嫌われる。

家族、親戚が揃うことでのメリットがあるものの、華美に流れていたり、血脈を頼らずとも社会保険が完備されたり、みんなが働いていて余裕がなかったり、そして長生きしすぎたり…。葬儀や墓は迷惑で重荷になる…の考え方が主流になってきた。

高度成長と核家族化が、日本の老いを孤立させている。さりとて、私自身は周囲に攪乱されたくない方なので、バリ島式がいいとまでは思わない。宗教に寄りかかれれば楽だが、そこでまた振り回される。人の集まる所、必ず権力や金の流れができる。そうやって宗教もいらぬとするなら、それに代わる信念とか柱のようなものを持たねば…は思う。(旅は、実に暇なのである)。

さらには闘鶏場があって、それで一回りだった。割れ門をくぐると、掘割では少年たちが遊んでいた。淡水の二枚貝がたぐさきいるようだ。



《掘割で遊ぶ少年たち》

そこから南へ戻って、ジンブランビーチへ。

駄菓子屋のような店に、自販機？と思うような機械がある。これがあまりに数の多い、バイク用のガソリンスタンドなのだった。



《バイク用のガソリンスタンド》

石油のとれるインドネシアではガソリンは安く、ごく普通の店で量り売りをしているのだ。昔はガラス瓶でも買ったという。ただ、バイクそのものや家電は、日本並みの値段がするそう。路線バスは走っているが、既定のルートしか走らず、観光者向き。一般家庭の自家用交通手段はバイク頼みになるという。

このビーチで夕日を眺めながらの海鮮バーベキュー(イカン・バカールと言う)だ。はるかむこうにGKBを認めるビーチは、人がいっぱい。バンドが回ってきたら、1,000円がチップの相場だそう。



《ジンバラビーチ》



《インド洋の夕映え》

まず、お魚のスープがきた。薬味として、生サンバル、ガーリック、普通のサンバルの3種が並ぶ。このあたりは基礎知識もない（検索：サンバルとはニンニク、唐辛子などを合わせた万能調味料）。

続いて、ロブスター、ハマグリ、普通のエビとカニ、イカ、タイなどの山盛りバーベキュー。



《海鮮バーベキュー（イカン・バカール）》

炭火焼でも、殻まで食べられるくらいにはなるものだなとは思ったが、そんな格闘までしたら、最後のタイまではいきつけない。空心菜炒めと、パイヤジュースでなだめつつ、まあまあで止め、タイと大量の殻が残った。バースデイパーティーをやっていたようで、バンドが流していった。

西側に雲があって夕日そのものとはいえなかったが、夕映えの空にはなる。花火が上がり、ハス型のネオンにも明かりが灯った。

よく遊んだ。

◇2月6日（金）ベノア

今朝も姦しい小鳥の鳴き声で起こされた。

寄る店の開店時刻の算段からか、出発時刻は9時半と遅い。それなら恒例のお茶会をやろう！になった。

抹茶は、欧米の健康ブームで輸出が増え、甚だしく値上がりしている。日本はあいかわらず、価値観を逆輸入し、不足してから騒いでいる。啓子ちゃん、いつもお心遣いをありがとう！



《バリ島でもお茶会》

そういえば、啓子ちゃんは、バリ島の直前に、京都でのお茶会と博多での大宰府天満宮のお茶会に出席し、昔のお茶の弟子にも会ってきたのだと言う。そして体調にも自信がついたようだ。

私も、やれることは、今やろう！に、傾きつつある。5月の玉龍雪山も、6月のピレネーも、早々と申し込んでしまっている。有給休暇を考慮して選んだ

のが、今となれば心外だが、それも運命というもの。その分、北観のツアーを挟み込めばいい。



《ホテルフロントの飾り》

さて、違った腰布になったアルナワさんからは、挨拶のバリ語のレクチャーを受ける。

スラムツ パギ おはよう
スラムツ シアン こんにちは（昼）
スラムツ ソレ こんにちは（夕方）
スラムツ マラム こんにちは
諦める。

バナナの木はよく見かける、緑のバナナは甘く、離乳食に使うそう。バナナのスープ、ジャックフルーツのスープと、青い実の時はスープにして食べているそうだ。ヒトはその地での食べ物を探し、時期ごとに工夫して、食べているものなのだ。

今日も盛りだくさんのスケジュールで、北の高原地帯に向かって走る。そういえば、普通に眺めていたが、車が左側通行だ。前に座っているのをいいことに、「左側？なんで？」と聞く。

「オランダの次に、日本が治めていたから」思わず「ごめんなさい」と言ってしまった。

第二次世界大戦において、1942年から終結の1945年まで、蘭印侵攻作戦の一環としてバリ島は日本の支配下におかれた。過酷な支配もあったらしいが、続く、オランダからの独立の際、帰国しなかった日本兵が独立戦争に加わる。そして「青年たちを率いた英雄」と讃えられているのだ。それで日本に強制された左側通行は、そのままで残ったらしい。

電気はジャワ島から来る。インドネシア自体は大国で、3つの標準時刻を持つ

サヌールはヨーロッパ人が好きな地区で…とか、いろいろ聞いたが、基本地名が頭に入っておらず、素通り。

二者択一の候補があったらしいが、これまた前に座ったのをいいことに、バティック店の方を希望し、寄ってもらうことになった。

和服にとってのバティック、つまり更紗は憧れの布。茶道においても、珍重された布だ。

工房の入り口には「世界遺産」の表示があった。

チャンチンでの蠟付けを実演している。啓子ちゃんが、実演に加わった。友禅の糊糸目や、蠟纈染めにも通じるが、根気作業そのものだ。



《蠟付けの実演》

配られた紙にはバリ更紗の特徴は、絵を美しく仕上げるために①輪郭を点線で描く。②伝統的な色は青・茶・黄色であり、これは生命の象徴の色とされている。とあった。そして売店へ。

裏まで柄が通っていれば本物で高く、そうでなければお土産クラスの印刷物で、安い。本物は日本で買うよりは安いだろうが、手数料がかかる分は高価。そういえば私は、お正月にたまたま寄った東急のベルシャ絨毯店で、福袋の更紗布（印刷物）を買っている。だから本物のバンダナまで…とした。でも「2枚買ったんだから…」と、まけてもらえない代わりに、バロンのマグネットはせしめた。啓子ちゃんは綺麗な彩色の本物のテーブルクロスを買って、そちら

は自動的におまけがついた。さっちゃんは「また買ってしまった…」とバロンの面を買っていた。



《バロンの面》

お面か…エヴェレスト三大ピークの時、お面マニアで、かつ、一枚買ったなら一枚捨てる主義の人がいた。「俺は、吉永小百合と同級生なんだよ。当時から綺麗だった。ピアノも彼女のお母さんから習ったんだ。どうだ、真似できないだろ！」と威張った。お蔭で吉永小百合を見る度に彼を思い出しはするが、彼の消息がわかるわけではない。また、セントラルヒーティングの会社に勤めていて、『修理に金がかかる』の苦情に対しては『小さな暖房器具を抱えて、移動するのが一番安上がり』と答えている…は、随分と参考になった。冬、一人の時は、室内でもコートを着て、暖房機なしで粘り、「冬山訓練用」と嘯いていた。その時も思い出したものだ（これも暇。今はヒートショック対策をしておく方が、健康上は安上がりとしている）。

ここは、定番の、日本人客の立ち寄り所になっているらしく、他のお土産品も置いてある。私は、和装小物のアタ製の籠なら、相場が判る。日本と同じ価格だった。欲しかったら、値段がどうのより、本場の本物から、思い出付きで選び、買えばいいことなのだ。そこのバイト風のおばさんが、昔、日本のあちこちを訪ねた話をした。「高くて、もう行けないねえ」 そうよ、何国人であろうと、行けるうちなんだよ！

さてさて、芸能・芸術の中心地ウブドを通過している。バリアートの美術館、彫像作家ニヤマン・ヌ

アルタの展示館、銀細工店を過ぎてしまう。速攻格安ツアーは、時間がない。



《素通りの美術館》

やや郊外になり、家具の間屋の多い地区を走る。木製もあれば、エマニュエル夫人の藤椅子みたいな藤細工の店もある。注文をとり、ここで制作するらしい。頭に物を乗せている女性もいるが、今はめっきり減ったそうだ。みな背が高くなりたいたいから。達人は頭に寄せたまま自転車にも乗るそうだ。



《世界遺産のライステラス》

世界遺産テガラランの棚田（ライステラス）も通過のみ。ヤシの木が点在するのが、いかにもバリ島の棚田だ。ここでは見せるために、車道側にだけ営業が許可されているそう。向こう側は、補助金をもらっての、景観維持の稲作を続けているそうだ。

大きなガジュマルの樹の前に、朝市が立っている。竹を建材にした店があったり、結婚式があつて飾り立てた家があったり…。あつ下校中…割れ門か

ら小学生が出てきた。午前中までで、帰るのだ。ぎっしりバイクが並んでいたのは、高校生の通学で、駐車スペースだった。



《結婚式の家のしつらえ》

バスは斜面に差し掛かり、エンジンをふかす。冷涼な気候では米がとれず、野菜や果物を作る。そして高床式の種苗床がある。左に谷を挟んで山々が見えてきた。



《高床式の種苗床》

ここがキンタマーニ高原で、聳えているのはバトゥール山 1717m だ。1917 年と 1926 年に大噴火をおこし、まだ黒っぽい溶岩流の痕跡が見える。カルデラ湖のバトゥール湖があり、外輪山のアバン山 2153m の方が高いものの、湖畔には温泉が湧き、グランピングも流行りで、中央のバトゥール山の方が日の出トレッキングでも親しまれている。途中まではバギーで上がれて、それから 2 時間だという。ア

ルパインツアーから出るツアーなら、確実にそうするだろうけれど、今回は、観光ツアーだ。



《バトゥール山》

広いテラスをもつレストランで昼食。「夜はバリ舞踊を見るため早目の夕食となるので、昼の量は控えて下さい」とは言われている。

しかし、有名なブラックライスプディングって何なの？（おしるこ風）揚げバナナだって、食べておかなくちゃ！（おかずの味ではない）ドラゴンフルーツジュースがあまりにも濃いピンクでびっくり。ビールより、南国生ジュースがお得と思う。

アバン山には盛んに雲がかかる…やっぱり雨季ではあるのだ。



《いろいろ確保》

そこから下った側に、コーヒー園があった。かすかにきいたことがある、麝香猫（コピ・ルアック）の糞からのコーヒー。ジャコウネコが飼われていて、コーヒー園の看板デザインにも使われている。



《コーヒー園の看板》

コーヒー豆は、熟すと緑から赤に変わる。ジャコウネコは夜の間、そのよく熟した実ばかりを選んで食べ、種を排泄する。それを拾って洗い、薄皮を剥いて焙煎すれば、最高品質になるという理屈なのだ。それらを従業員が日本語で説明するから、ここも日本人に特化した店ということだ。



《手前がジャコウネコの糞》

AIロボットではなく、生きたジャコウネコが選別してくれる…私は知恵のある共存と思うが、動物虐待としての問題もある…と、価格を調べたネットには出ていた。鶉飼いやあるまいし、糞の利用で飼われるくらいがなんで虐待なの？それなら、ジェンダー指数 118 位の日本の女性は、虐待の極みでいるし、慢性サービス残業は、もっと虐待だ…（またまた脱線）。

コーヒー園は私有だが、野生のジャコウネコも入りこみ、糞を落としていく。糞のなかに豆がまばら

に混じっている程度かと私は思っていたが、それは豆尽くしの、豆固めの糞だった。臭くもない。さらには、大きめの二つ合わさったようなのがメス豆、一つのがオス豆で、メス豆の方が高い。



《14種のテイスティング》

紅茶も含めての 14 種を無料でテイスティングできる。私は、蘊蓄を垂れて豆や茶葉にこだわったあげく、安易に混ぜ物をしたら、そもそもが台無しになるんじゃない？と考えてしまう。だから混ぜ物系は一匙味見までで十分だ。でも、コピ・ルアックだけは別格で、有料試飲(?)なのだ。メスが一杯 800 円、オスが一杯 500 円だという。でも「東京だったら、一杯が 4,000 円から 5,000 円するよ」と言われたら、飲まないわけにはいかない。その結果は、しょせん、違いの分からない舌ではあった。



《左 メス豆、右 オス豆》

試飲のテラスからは、バリ島のジャングルが見えた。野生のドリアンやジャックフルーツがぶら下がっている。

南国はほったらかしでも食べ物ができる。服装は簡単でいいし、バラックの住まいで十分だし…。しいて働かなくても食べられるのなら、競争しての勉強もしなくてもいいのだ。寒い地域で生きる方が、知恵が必要となり、しいては文明国になっていく。さらに資源を求めて、世界へ進出し、のんびり暮らしの国を植民地にする。資源を横取りし、リゾートにして楽しんだ。何が幸いするかわからない。



《お祈りの作法》

そこから南下して、世界遺産の、ティルタ・エンブル寺院。インドラ神が聖なる泉を湧き出させた場所とされている。ここでは腰布を渡され巻いた。



《バリ島のジャングル前》

でも、欲望のあげく、他の人種、他の生き物などどうでもよくなり、自身の不老長寿だけを願うようになるのだったら…進歩って何？幸せって何なのだろう？これも暇な旅ゆえ…少しバリ・ヒンドゥーに感化されたかな？

さて、ルアックコーヒーもお土産候補ではあるが…4袋入り1Pが415,000ルピアということは…4,000円だ。「ハイ、4,000円」は、バラマキに相当しないでしょ！「1袋（15g入り）1,000円よ」で妥協がせいぜい。2Pでおしまいとする（ネットでは、100gが2,690円～18,370円とあった）。

ここの木彫り土産も見事。ヒンドゥー仏像にしても洗練されている。こういうのはおざなり…とは違う、根源的な美のセンスと修養だと思うから、惹かれるが、手は出ない。我が家に増やすわけにもいかない。



《腰布を巻く》

緑の腰布を巻いた人が大勢沐浴（ヒーリング効果あり）している。女性も胸の前で布をクロスさせて巻き、加わっている。



《沐浴》

右へ回り込むと、もくもくと聖なる泉の湧く池があった。その先の神殿には入れない。奥に咲いているのは、あとで買った花図鑑によれば、アフリカンチューリップツリーだった。



《アフリカンチューリップツリー》

反対側の高台には手入れされた芝生仕立ての今風の建物があり、「デヴィ夫人宅」と聞いた。大統領夫人なら、別格のことができるのかも。

さらに南下してゴア・ガジャ遺跡。11世紀頃の古代遺跡で、「象の洞窟」の意味。かなり下まで階段で降りると、発掘されたという6人の女神が掘られた沐浴場がある。



《ゴア・ガジャ遺跡 魔女ランダの前》

いかにも写真映えしそうな魔女ランダが、あんぐりと口を開けていて、入って左にガネーシャ、右に3つのリング。間のくぼみは行者が瞑想した場所と言われる。家屋も復元されているが、私は、いかにも南国の、凝った花の作りが、面白かった。



《再現遺跡と凝った花》

このプタヌ川流域は8～14世紀の王朝が栄えた場所らしいが、それこそインドネシアの小さな島の王朝の興亡などは、どうでもいい類になる。ここには、現役の画家のアトリエがあった。見るだけ。

夕方になり、ウブドビレッジホテルへ。入り口通路はセキュリティ上、バスがギリギリほどの狭さだったが、中は広々と水田が広がり、個室が点在するという作りだった。カエルも鳴けば、ジャワアカガシラサギもいる。自然を切り取って優雅に楽しむリゾート地のホテルということだった。先導してくれるボーイが、これまた微笑みの好青年。



《好青年に案内されて》

ウエスタンのコース料理として、スープも、ステーキもデザートも、ソースを散らして、品よく出てきた。食事はみんなおいしい。国立観光大学も建て

て、おもてなしに徹する…とはこういうことか…。異国情緒を保ちながら、洗練されている。

明日は悪戯をするモンキーがでてくるらしいが、モンキーフォレストの傍を通過して、薄暗くなってきた中、ウブド王宮へ。

ここでバリ舞踊があるのだ。カンボジアのアプサラダンスの場合は、内戦時に途絶えてから復活している。こちらは、伝統舞踊と打楽器オーケストラのガムランが途絶えたことがなく、さらに洗練されていたものだ。

アルナワさんはまとめてケチャといていたが、それは大勢の男性によって演じられる合唱舞踊を指すらしい。バリ舞踊には演目が数々あるのと、多くの歌舞団があって、曜日ごとに当番制で出演している。私たちはウブド王宮での金曜日ゆえ、サダ・ブダヤというリーダー格の歌舞団の、レゴン、トペン、パロンの曲目を見ることになる。

さて、19時30分の開演より早めに王宮には入れて、そこそこ前席をせしめられた。



《本来の会場》

それなのにまずガムランが座り始めた定刻10分前、ポツポツ…雨粒が落ちだす。雨天用の、通りを挟んでの室内演舞場へぞろぞろ移動する。写真のた

めには遠慮などしてられない。強引に前のベンチに割り込んで座る。

外はジャバジャバと、スコールそのものになった…雨季だもの。これで、かえって安心して見ていられるというもの。でも密集で、ひたすら蒸し暑い。

鉄製や竹製の打楽器そのものをガムランといたり、音楽全体をガムランといたりする。楽器を乗せる台も、キラキラ輝く聖獣模様だ。



《踊り子とガムラン》

両脇に楽団を控えボロンボロンと鳴り渡る中、中央の幕から、見開いた目と、反り返った指の踊り子が出てくる。豪華な衣装に、東アジア共通の中腰での動き。



《見開いた目が印象的》

バレエがスラヴ系のまっすぐで長い脚での躍動の踊りとすれば、東アジアはどこも、中腰でのしなやかな抑制された動きが共通する。ジャンプなどしな

い代わり、顔、目線、腕、指先にも物を言わせる細やかな踊りだ。

次には二人の緑の衣装の踊り手が加わる。ガイド本に寄れば、ランケサリ姫とラッサム王らしい。男女役の区別もつかなかったが…。



《ランケサリ姫とラッサム王》

例のバロンが出てきた。村を守るご神体で聖獣だ。日本の獅子舞も中国の獅子も同じと思うが、ふたりの踊り手が入って、舞う。そこへサル役が出てきて、ちょっかいをかける。



《聖獣バロン》

次が、仮面劇のトペン。6人の白い仮面に、悪者らしいジャウツがからむのだが、フォーメーションを変えての見栄えは見えても、ストーリーの流れはわからない。

魔女ランダが出てきたり、三人の王様が出てきたり（劇？漫才？）。華やかに美女たちが群舞して、最後は悪者が戦士たちに打ち取られてフィナーレ。途

中、雨の中、中座する人達があったが、それは深夜発の飛行機に搭乗の都合だったのだろう。



《仮面劇トペン》

21時に終わり、無事アルナワさんとも合流できた。

◇2月7日（土）ベノア クタ



《ニッコバリでの朝日》

三連泊だったので、朝食ブッフェはひと通りは食べられたか？さっちゃん、出発前の風邪の影響か、寒気を覚えると、おなかの調子が悪くなったらしい。私は、エジプトでもアメリカでも、突然の便意という不調をやってから慎重派になった。今回は日系ホテルが安心だったし、途中の食事がおいしかったことにもずいぶん救われた気になった。

旅を単に贅沢！と切り捨てる人がいるけれど、そして、パック旅行にすぎないとはいえるけれど、大

胆かつ細心でいなければならない。「日本ではない」は魅力であると同時に、緊張の連続だ。

毎日素敵なスカートを選んでいる啓子ちゃんの今日のは、なんと、黒と白のチェックだ。期せずして、バリ島にこだわったファッションということになっていた。



《最後の朝食》

蒸し暑い国に来たから…と飲水に頑張ってみたけれど、ミネラルウォーターはやたら余ることになった。トッコさんは「余ったお札と一緒にアルナワさんにプレゼントしていく」と言う。連泊で楽をしたが、今夜出発なので、最後の荷造りだ。

きれいな花の庭も見納めの散歩をし、トランクをフロントに預け、9時半集合。



《バリ舞踊のモニュメント》

まず、ムラスティービーチへ。バリ島の最南端といえる。付近は石灰岩地帯で、水道管も通せず、寒村だったらしい。それが白い断崖に、下への道路が開通して、手軽なビーチに、新観光地になった。

幸せなことに、今日も晴れ。インド洋が青い。車道脇には踊り子の像が並び、インドラ神も立つ。後発観光地は、写真映えすればよい…風の趣向だ。

30分ばかりでは泳ぐわけにもいかない。さっちゃんが海からの贈り物を拾ってくる。海部門を愉しむには、たっぷりの時間がないと…。今回は、海のジャンルが抜けているから、まだまだバリ島を味わったなんて言えない。

寒気払いで選んだバリ島。その進んだ観光化が不思議で、それに、閑散のビーチがあまりにヒマで、この時に、冒頭の質問「なぜ、バリ島だけが観光地になったの？」をアルナワさんにしたのだ。



《ムラスティービーチ》

さて、バリ島へ来る前、私はジャレド・ダイヤモンドの「銃・病原菌・鉄」を再読していた。それは1998年度ピューリッツアール賞一般ノンフィクション部門を受賞している。

「世界の富や権力は、なぜ現在あるような形で分配されてしまったのか？」 具体的には、「なぜスペインが海を渡りインカを滅ぼしに行くことがあっても、その反対がおこらなかったのか？」ということだ。

日本に生まれたことは、世界では勝ち組といえることだ。言論自由な日本、翻訳本が読める日本ゆえ、感謝して「なぜ？」の解を知りたい。

本は「その違いは、いつ、どんなことから生じたのか？」を分子生物学、遺伝子学、生物地理学、環境地理学、考古学、人類学、言語学などをカバーした筆者の、卓越した知見で考察したものだ。

彼は、妻が日本人であり、進化学者として最初のフィールドがニューギニアだった背景から、欧米学者の中では例外的（とかく欧米学者は、欧米の歴史だけを研究対象にし、欧米人が遺伝的に優秀だったから覇者になれた…の結論にもっていきがちだった）に、早い時期に東南アジアや太平洋に進出した人類がいたことを踏まえての考察を展開している。

そのうえで、狩猟時代まではどこも同じで、知能差も見られない。むしろ、鋭利な石器や土器の出現は東アジアが早く、自然観察力、天文学も優れていたとする。



《インド洋の贈り物》

さらには、彼らが自然と共生している現在を、経済や学術の物差しでの「劣る」とは評価できない…も、述べている。この基本信念があったから、公平な考察を展開していったともいえる。

決定的な解は、「ユーラシア大陸が、東西に広く、同じ緯度の地域がつながっていた」ことだった。

栽培向けの品種を見出しての農耕が早くに広がり、富が蓄積し、技術や発明が早くに伝播し、切磋琢磨もされた。そして、農耕で富が増えるのを待つより、武力で奪う方が手っ取り早いから、銃や鉄をもつ部族が優位に立った。それが加速し、格差はさらに広がり、海外進出、植民地化が進行していったのだ。

同時に家畜も、大陸には多種の大型動物がいたことから、家畜にできる種の数も多かった。特に馬は移動力、戦力になり、戦闘に貢献した。さらにはそ

れら動物からうつる病原菌、他民族との交流による病原菌に接し、免疫力で勝ることになった。

インカなどの先住民を滅ぼした実体は武力ではなく、実は、未知の病原菌＝免疫力の差の方だった。

さらに2度の世界大戦を経て、現在の世界…経済地図は出来上がっている。

そうやって、ジャレド・ダイヤモンド氏は「現在見られる格差は、人種の差では無く、東西に広い大陸という地理環境によるもの」と解き明かした。

しかし、その後に世界はさらに混沌をきわめている。

私たちは、2019年12月に発生したコロナによる不毛の4年間を体験することになった。それはオンラインを加速し、米中の台頭へと経済地図をさらに塗り替えた。IT機器に暗号資産に、AIに、わからないことだらけになってしまった。そのうえフェイク情報、サギ事件が横行している。

世界は、急激に「対話より武力」となり、ロシアのウクライナ侵攻、イスラエルのガザ紛争。それらが解決しないまま、ベネズエラ介入、イラン爆撃へと、たちまちきな臭くなってしまった。国連も、米議会も、国際裁判所も無力…。戦闘の主力は無人機になり、その前にはサイバー攻撃が横行しているという。

私が最初にこの本を手にしたきっかけは、コロナ禍だった。コロナに絡んで、増刷され平積みされ、だから目に留まったのだ。それまで、感染症が世界を変えようと思ったことがない。

スペイン風邪の話も知らなかった。それは新兵器が開発され、大量殺戮になっていったことに注目がいったのと、それぞれの国が他国からうつされた名称にしている、パンデミックの概念にまではならなかったせいもあったようだ。

もう一つ大事なことは、植民地化された側は、その時点では、「自然と共生する豊かさ」を手に入れている。生産と消費、人口にバランスがとれていれば、

平和に暮らせて、ヒトは野望をもたない。死も自然のままに受け入れる文化でいたのだ。

しかし、そういった理想郷は、武器を手にした者達には簡単に敗れ、殺され奴隷にされ、人種として劣るとされる。一方その覇者の方は、もっともとの欲望に苛まれ続け、死を敗北として恐れ、老いも受け入れられないのだ。

経済的に豊かになった日本は後者の側だ。戦後を、「もっと、もっと」で生きてきた。全能感を手にしたら、死も老いも受け入れられない。



《野生のドリアン》

きな臭くもない、平和な観光の島バリ島…。

向こうには船があった。崖の上を見たら、白鳥が描かれている。ブラフマンが白鳥に乗るにしても、この南国に飛んではこない。車道脇には、やはり白鳥の像があり、二羽の首がハート型を描いていた。

割れ門も出来合い品で、いかにも観光開発ものだ。

そこから上がったゴルフ場の前には、GWK を模した像が建っていた。このバドゥン半島の真ん中にGWK が建ち、グラライ国際空港からの高速道が伸びて、広大なゴルフ場や近代ホテルが建てられている。国外資本がどんどん入り込んでいるらしい。うわべだけバリ島風…なんとなく違和感があった。

この半島の南西の外れにあるのがウルワツ寺院。

ウルワツとは岬の意味で、インド洋の荒波が打ち寄せる 70m の絶壁の上にある。これも高僧ニラルタがからんでいる。

ここに、昨日から予告されている、悪戯サルがいるのである。帽子や眼鏡、スマホなどをつっぱらっていく。それは、餌をもらうためであって、係員が餌を与えると手放すそうだ。でもそのタイミングが遅いと、噛んで壊してしまうから…と、各自が持ち物のチェック（片づけてしまうか、きっちり押さえているか）をされた。



《ウルワツ寺院》

入り口は、きわめて整備された公園で、まず、インド洋を眺める。右には断崖の上にウルワツ寺院の3層のメルが見える。左には半円形のケチャ用のステージが見える。ここからの夕日と、かがり火をたいてのケチャダンスは有名で、よく掲示されている。映画「アバター」にあった、原住民が生命の樹を囲んで座り、一斉に上体をくねらせて踊るシーンと同じだ（反対にケチャの方があのシーンのモデル）。



《ケチャダンスのステージがある方向》

断崖沿いの石段を上がり、いよいよガネーシャの門。でも、その境内には入れない。

オッ、サルのお出まし。ベッカム頭のスマートなサルだ。木の上でも待ち構えている。ちゃんと用心してるよ…のポーズで下を通過する。でも、そこから回り込むと、山梨夫人がサングラスを取られたらしかった。「ほんとなんだ！」と感心していたら、私達の前を歩いている女性に、さっと黒い影が飛びつき、やはりサングラスがとられていた。賢い獣だ。アルナワさんが、近くの職員にそう告げて、職員はやぶの中に入っていった。サルはそれを待っていて、盗品を手放したらしい。



《悪戯サル》

降り口の方には、子ザルを抱えた母ザル達がいる。こちらは機敏に動くわけにもいかず、やり過ぎ構えでいて、その後離れていった。ここにあるインドラ像には、サル像も加わっていた。



《ミーゴレン》

近代風のホテルに入る。上のレストランで、インドネシア料理のオリジナルプレートのランチだ。焼きそば風のミーゴレン、サテーという串焼き、マヒマヒ（シイラ）のグリル、エビの揚げせんべい、ポテトサラダに、特製サラダが、バナナの葉の上に盛られて出てきた。

食後、上でそのまま待つのか、下のロビーで待つのか？情報が混乱。注意力散漫になりつつある。



《ギャラリーにあった GWK》

次はクタの大きなお土産雑貨店モル・バリ・ギャラリーに移動。GWK 像が飾られた中は、広いスペースに、食品、衣類、器物、おもちゃ、そして奥には高額品のゾーン。そこは現地だから割安？でもなさそうだったし、反対に、他はいかにも大量品の安っぽさが満ちている。衣類は、メイドインインドシアの色が落ちるエプロンドレスの洗濯に閉口の経験から、結局「買わない」とした。



《ジェンガラケラミックの陶器》

次が有名なジェンガラケラミック。ハスの葉やカエル、バナナリーフ、女神などをモチーフにしたエキゾチックな作品がある。しかし重い。九谷焼きや輪島塗の県から来て、食器を買う…はやれない。

ここでトッコさんは、「あの人はお茶の先生で、この人は元学校の先生で…」をやっていた。アルナワさんに茶道の説明が判ったかはわからないが、山梨夫人が、かなりのお茶通らしいは分かった。そちらの話題で話しかけられたが、私は「茶名を取ったまで…で止めました」として、乗らなかった。

今の方が、あの頃お茶に通っていた方々が、とてもヒマだったと判る。稽古そっちのけで、おしゃべりに暮れていた。気晴らしが第一目的だったのだ。高砂大学に通ってお茶を選んだ母の場合は、手順を覚えることを修行のように取り組んでいたし、毎度亭主役を引き受けていたが、だからどうなる…でもなかった。

耳年増？ですぐケチをつけたい私。時間潰しではなく、それプラス何かでないと、もったいないと思う。また、どうせ捨てられる程度の物作りに自己満足して、時間とお金をつぎ込んでも、仕方がない…とも思う。

これまでのように、向こうの希望通りに働いて、その対価を得る…はとても判りやすい。手元にちゃんと対価という成果が残る。

ただ、今現在の私は、「見える対価が欲しい」のその心は、「植民地が欲しい」と、根源で似ているのかもしれない…を思う。もう、違う満足の次元に行かなくては…。それが結構難しい。

次が、アフタヌーンティー休憩。判らん所へ入った…の認識だったが、ガイド本では、「モーベンピックリゾート&スパは、スイスを拠点に展開する5スターリゾート」とあった。ラグーンプールほか、子供用の設備も豊富でファミリー滞在に最適とある。しつらえがお洒落ではあったけれど…、このあたりは、「豚に真珠」の類。

フロントでは、ガムランの演奏者の男性が二人いて、生演奏を聴かせてくれた。



《歓迎のガムラン》

続いて、バリ・オーキッドスパでスパ体験だった。これまた、バリニーズマッサージと言われても…なのだった。学研の賞品で「てもみん10分券」を当てて、やってもらったことはあるが…。有償でこの手のサービスを受ける…は、美容院でのカットとシャンプーくらいではないかしら。

そういえば、トルコでハمام体験をやったが、4人一気に、人手がなかった。それこそ丸裸で全員転がされ、猛然とこすられ、頭からザバーッと湯を浴びせられて上がり…と、雑に扱われた思い出だ。



《スパの受付で》

3種の香りから、ラベンダーを選び、フェイシャルエステコースを選んだトッコさんと一緒に部屋で横たわる。そう、先輩学研指導者たちが「トドのように寝転がって…」と言っていたあれだ。アンケートには「特に重点的に」や「避けてほしい所」などと書いてあるけれど、これも未体験には不明。

使い捨てパンツ一貫でタオルを巻いて横たわり、オイルを塗っては、足から順に圧力マッサージ。施術は、小娘ではなく、私に似た体格の人だったから、よしとしよう。

マッサージといえば…昔、最初の整形外科でのパート看護助手の時には、同じ電気療法部屋に3人のマッサージ師がいた。松平健に似たハンサムな一人は1年後に開業し、その心積りがあったからか、接客も上手で、人気があった。強面の一人は患者の腕などを振り回すだけで、多くの方にこっそり「あの人は外してくれ」と頼まれた。最後の寡黙な方は、じっくりとツボを押すタイプで、こちらもよく効くと人気があった。患者の切れた時に試しにやってももらったら、イタタ…になるくらい押された。でもこちらが不調でもなかったから、それが効いたのか？の判断はできなかった。

こちらのは医療というより、単にリラックス効果のあたりだろうが…。

ともあれ、1時間、うつぶせになり仰向けになり…で、上がり。アンケートには、全てよしに○をつけ、出てきた。

啓子ちゃんは、白と黒のスカートを「バリ島にこだわってか？」と聞かれたらしい。お土産を買わなくても、それで思い出せばいいね。

次がモダンなショッピングモール。かつてデパートが最新の文化施設だったようなもので、家族連れで大賑わいだ。派手なテナントがいっぱい入っていて、全くバリ島らしくはない。ホールでは子供を乗せたカラフルバスが、循環している。冷房も効いて、都会そのものだ。観光業で稼いだら、こちらでお金を落としてください…のような趣向か？

フリータイムに私たちは本探しとした。さっちゃんは鳥、私は花の図鑑が欲しかった。そんなのはなくて、ここもアニメブームと分かった。啓子ちゃんは、孫息子の私立中学合格の報が入り、お祝い兼のボールペン探しをした。

待ち合わせのフードコートスペースも、日本と同じ。世界中が同じ造りのモールになっていき、それが文明化で、グローバル化ということだ。



《中華レストランで山梨夫妻と父娘ペア》

そこで1時間潰してから、中華レストランへ。竹を支柱にした造りになっている。

またスコールが降ってきた。雷も盛大に鳴った。私達は、結局観光地では傘をさしてはいない。お天気には恵まれ、オフシーズンの静かなバリ島を愉しめたことになっている。この天気にバンドも暇そうで、たっぷりリクエストに応え、チップをうけとっていた。

さっちゃんが夕食控えめにたいして、啓子ちゃんは、ルピアの残金を全放出しての久しぶりの赤ワインを注文。祝杯を挙げられるほど、元気でいられたんだなと私も嬉しかった。

さあ、いよいよ空港に向かう。ホテルから直行してきたトランクを受け取り、空いたスペースで着替え。お土産も、トランクに詰める。あわただしく汗をかいたが、これから雪国に戻るのだ。水は？バッテリーは？厚手の上着を出したか？をやって、混乱のうちに、アルナワさんには「ありがとう！」で別れることになった。

帰りも直行便だから、預ければ、成田で出てくることにはなるだろう。最後にルピアを始末しようとしたが、空港売店の品はどれも高かった。結局チョコになる。ここの本屋で、鳥の図鑑を見つけたさっちゃんに教えられて、『Tropical Flowers』をカードで

買う。次にジュースのあたりでコインも始末しようとしたら、不足したらしいが、OKにしてくれた。

山梨夫妻が「日本は雪だって。予防の運転中止が多いみたい。山梨へ帰れるかしらね？」を言っていた。また、雪国暮らしだ…。

◇2月8日（日）デンパサール～成田～金沢

日付が変わった所で、離陸。後方にはけっこう空席があった。夜中、ハンバーガーみたいのを受け取り、朝方、機内食をもらった。

やはりよく揺れて、9時成田着。雪景色の成田は初めてだ。欠航便などの混乱があっただけか、機体は随分と滑走路をウロウロ、ノロノロだった。



《雪の成田空港》

寒～。バスで東京駅に着いた所で、解散とした。啓子ちゃんは、成田エクスプレスの予約を遅らせるらしい。ハラハラしたくないさっちゃんと私は、着いてからの新幹線チケット購入としていた。トッコさんは、ジパングの予約のために、これから並ぶそう…。

夫は私の帰宅を見届けてから、富山へ出かけていった。

積まれた郵便物の中に、こくみん共済の封書が混じっている。新しいカーポートの見積もり請求書も混じっていた。悟を呼んで、協議する。悟の家の方の新設カーポート（大屋根からの落雪で車の屋根がへこむ被害があった）の場合、正確には建蔽率に引っ掛かるらしく、その解釈や対応を、直接業者に電

話で説明してもらった。納得のうえで、両方の施工を決めた。

◇エピローグ

結局それは、20日と21日に施工された。我が家の分は、撤去費も新カーポート代金も、自然災害保険から出た。自己責任で保険をかけ申請すれば、共済の範囲でちゃんと補填される。



《工事中的の新カーポート》

実家の兄の方は、大腿骨の手術は成功したものの、院内感染でコロナに掛かり、一時危篤になったそうである。病院は午後3時からの指定時間内に、予約のうえの15分の面会としている。そこに勤務している甥が寄ってくればいい。三人の甥・姪からは何も頼んできているわけなし…。切れていくご縁のうちと解釈する。

翌日から出勤した勤務先では、募集をかけ、何度かの面接をやっている。3月4日、監視カメラがついて早々の入所者への暴言（大声）が問題になり（本部に映像チェック員がいて、審査会議もあるらしい）、その職員と責任者である課長に減給の処分が出た。3月6日には、4ヵ月目に入った新男性職員が突然に辞めていった。こちらも、もう切れていくご縁の話だ。（新派遣当直員も、1回の出勤だけで辞めていた。）

さて、工事中だった2月21日昼、KKRホテルでの、総料理長の「現代の名工」選定記念の特別賞味

会「能登 春のおとずれ」に参加。もちろん私の推奨。夫は朝食バイキングも嫌がるが、この手なら、まだ妥協してくれる。私はお着物を着て、目指すところは、老夫婦の実りの時間だ。安物買いへの反省をさっそく実行だったのだが、私達には上品で薄味すぎた。修行を積んだという「すっぽんの椀盛」も、共に「わからない舌」同士だった。



《すっぽんの椀盛》

夫は、製菓会社の接待が盛んだった頃のおこぼれに少々与れた方だ。それでも絶品といえば、志賀の漁労長から届いていた甘エビだろう。殻が剥けないくらいの鮮度で透き通って甘くて…「天皇様以上の物を味わわせてもらっていたんやね」と笑い合った。

夫が帰ってくる週末の料理には気合を入れているつもりだが、もっとこんな時間を大事にしていかなくちやならない。



《金沢城であった放鷹術》

21日は、金沢城での放鷹術を、散歩がてらに一緒に見に行った。本来なら中止にするほどに風が強くて、鷹たちは思い通りの演技をしない。私達の前には、超望遠レンズを抱えた一群がいて、技術を得得とご託宣のご老公がいた。それで鷹匠のせっかくの説明が聞きとりにくかった。カメラにのめりこむ…も、よくある老後だ。

22日夜、孫娘の羽花が左腕を痛がり泣き止まない…との電話が入る。慌てて、友人の整形外科に電話を入れ押しかける。よくある脱臼ではなく、転んだ拍子に肘関節が反り返ったようになっての痛みだったらしく、翌日には落ち着いた。父母と祖父母4人が付き添い、翌日は嫁の祖父母も心配して…の大騒動だった。

孫にはそうやって皆に見守られていることでの自己肯定感を、息子夫婦には親ならではの心配を、味わってほしい。子を持って知る親の恩というが、人を育てるのは、ペットを愛玩するのとは大違いだ。身勝手なままの独身が増えていることに危惧してしまう。まさに、老婆心だ。

2月26日、45回目という福光屋の「美酒の宴」に一人参加。酒類は福光屋持ちで、東の芸妓が絃出。これも割安でお誘いできるイベントと判定。3週間後の牡蠣パーティー用に、余り酒を確保した。



《美酒の宴》

3月1日、加賀友禅検定中級を受ける。1問のミスが出た。紀行を書く前に、まず勉強しなくっちゃ！のプレッシャーになり、また筆が遅れた。

2年前に訪れたコルティナ・ダンベツツォを会場にした冬季オリンピックと、急に始まったイラン攻撃にも、攪乱されてしまった。

我ながら馬鹿かと思いつつ、旅の思い出とそれにまつわり何を考えていたか…ようやく、最終日まで書き終えた。

仕上げた3月8日は、知事選、市長選、市議補選の投票日であり、国際女性デーでもあって、ジェンダー記事が多かった。中日新聞の一面には「政治の男女平等 石川最下位」が見出しになっていた。

古都金沢は、やはり無言の圧力が強いと思う。女が黙ってやるもの…の風土が依然とある。

住んでいるからには周囲に馴染もうとすれば、地域の嫁とばかり、当然顔でタダ働きを押し付けられる。

親族も同じで、長男と奉られてきた者達は横柄に、妹や弟嫁を顎で使って平気である。親子の壁に不愉快な思いをするより、昔の概念が染みついた世代の女の方が、遠慮なしに頼めるからだ。

ただ、それに応じて、ちゃんとなし、さらに当てにさせてきたのは、実は自分だった面もある。だから、「気のいいひと、都合のいい人を止める！」を念じなくてはならない。

同日の文化欄での、哲学者藤田正勝氏の言を、ちょうどバリ島帰りゆえに引用すると、

「次のような話を聞いたことがあります。ある日本の商社員が、どこか遠い南の国に行って、懸命に働いていたら、現地の人からなぜ毎日そんなにあくせくと働くのかと尋ねられたという話です。それに対して、よい成績を上げ、お金を貯めるためだと答えると、お金を貯めてどうするのかと問われます。退職後、どこか景色のいい所に別荘でも建てると答えると、そこでどうするのかと尋ねられます。ハン

モックでもつってゆっくり昼寝すると答えると、現地の人がわれわれは最初からそうしていると言ったという笑い話です。」

そこから「何のために働くのか」と、さらに「何のために生きるのか」へ、次週からの話が広がっていく予定なのだ。



《南国の果物》

でも、そもそも資源のない日本が、必死に働くのは当然のうちである。日本は、勝手に果物がなり、年中稲が実る南の島ではない。資源は降っても、湧いてもこない。国内外で、働きに働いて、1億人が食べていけている。設定が安易すぎる例え話だ。

それにいつも思うことだが、キャリアと資産が自分名義で、育児や介護・家事などのケア労働を妻任せの男性が展開する人生論や哲学は、屁理屈で、理想論になりがちだ。かつ、それで通るのだ。どの国でも、我慢強く底支えしているのは女性の方だ。

ジェンダーや、男女賃金格差も気にはなるが、制度に「ただ乗り」は、それ以上に不愉快で卑怯で、心をざわつかせる。

油を注ぐように、大阪出身の美容師から以下を聞いた。

「大阪は、17人中1人の割合で生活保護を受給が有名、〇〇区は7人に一人のワーストで有名でした。しかも、その3分の1が、公務員の関係者だったそうですよ。それは知事が変わってから改善されたそうですが…」

生活保護とは、生活扶助に住宅扶助、そして、医療費は無料…。GHにも、生活保護受給者が入ってきたばかりだ。

案じなくても、いざとなれば同じサービスを受けられる…それが日本だ。喜ばしいことだが、100%喜べることなのか？真面目に働かなくても、食べさせてくれる日本…どこからその資金が出ている？

非正規畑ばかりにならざるをえなかったが、ずっと働こうとしてきた…。2年の看護助手、28年の学習塾指導者、14年の高校非常勤講師、5年の介護パート…ならぬ堪忍をし、折り合う所を探し、働いていなかったことがない。それで得た金融資産、人材としての自信。

それらを悔いはしないが、この先も、この路線を続けるのか？ならぬ堪忍と折り合っても、対価あればよしとしていくのか？

おりしも、「働く」の信念が一致する知人の、勤務先テナントがデパートから撤退することになった。そのデパートは、5年前には経営者が変わり、能登半島地震が追い打ちをかけ、撤退か？を噂されつつ、まずテナントの撤退が、激しくなっている。趣味の篠笛師匠は長く、文化センターの講師もやってきたが、全教室がそこから移転となった1月末には、講師を止める決断をした。隣接するホテル…金沢の高層ホテルの先駆けだったホテルからも、看板といえるレストラン部門が消える。

多くの人が職を失い、転身を余儀なくされようとしている。

店長抜擢を受けて、単身県外に出向したことのあつ彼女（もと、学習塾指導者仲間）も、この際、販売員に区切りをつけ、とりあえずフリーを決断したという。

揺れる心の仲間がいてくれてホッ。

元々、子育てなどの家計責任はもうない。ここらで「働く信念」のあたりを宥めて、老後に向かい合っていかなければならないのは同じ。時間潰しをやりた

くないのも同じで、「PCを使いこなすあたりに、まずチャレンジしたい」も同じだった。

もちろん、「行けるうちに行こう！」は、大前提である。勤務があろうとなかろうと、予約をいれておかねば、夢は実現していかない。

それなのに、申し込んであつた玉龍雪山が、日中関係の悪化によって、直行便から乗り継ぎ便に替わり、さらに3日後の今日は、中止連絡がきた。

海に向かうの横暴なトランプ、何かと日本の揚げ足を取りたい中国…といった世界情勢は、行けるうちに外遊を…の私の夢も砕いてしまった。

怒りの報復は、さらにとぼっちりを増やし周辺を巻き込み、もっともっと、大変なことになりそうである。

何も悪いこともしていないのに、ミサイルに怯えねばならない人達がいる…。

それに比べれば、なんと贅沢なレベルでのグチグチ…このあたりでとしよう。

—完—